

## 「美人画の雪月花 -四季とくらし 培広庵コレクションを中心に」展 作品解説

徳島県立近代美術館

### ■四季【夏】

#### 18 鏑木清方(かぶらき きよかた) 「夏姿」

1939(昭和14)年 絹本着色 徳島県立近代美術館蔵

透けるように薄いのれんを少し持ち上げるこの女性は、朝顔が描かれた団扇を手に持ち、燕子花(かきつばた)の文様の着物をゆったりと着こなして、とても涼しげです。清方(きよかた)は、自身が生まれ育った江戸の人々の美しい暮らしぶりを愛し、それを作品に留めようとした画家でした。日常のひとつひとつを味わう様子が、女性の何気ない仕草から伝わります。(H.M)

#### 19 伊東深水(いとう しんすい) 「薄暮」

1940(昭和15)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

涼しげな編み目文の着物に博多帯を締めた女性が、団扇を手にして、黄昏時の橋の上で、ゆっくり涼んでいるようです。背景は、材木がたくさん集められていることから、東京の木場の風景と考えられます。昭和初期の東京では、多くの橋がコンクリートで建て替えられていましたが、木造の橋を舞台としたのは、江戸の風情を残すかつての東京を懐古しているからなのでしょう。すでに世情も変わっていた日中戦争下の美人画です。(Y.M)

#### 20 紺谷光俊(こんたに こうしゅん) 「更衣(こうい)」

大正後期 絹本着色 培広庵コレクション

夏の衣替えのようすを、江戸時代後期の風俗で描いた作品です。涼しげな日常生活の一コマと見ることもできますが、女性の着物が薄い夏生地のため透けており、エロティックな趣も感じられます。右側にはかわいい子猫が描かれていますが、猫と美女の組み合わせは、浮世絵でよく描かれた題材。『源氏物語』の柏木と女三宮の恋のはじまりが重ねられた、恋の暗示です。(Y.M)

#### 21 山村耕花(やまむら こうか) 「町娘・遊女」

1918(大正7)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

本来は四幅対の「四季美人図」だったと考えられています。右幅の「町娘」は春の図です。島田髷(まげ)で装った女性が、常磐津(ときわづ)の「八百やお七恋桜」の冊子と唐傘を持ち、黒地に藤をあしらった華やかな着物を着ています。左幅の「遊女」は夏の風俗です。動きのある「町娘」とは対比的に、縦縞模様

の入った夏物の着物を着て、まっすぐ立っています。なおその姿は、〈四季図〉(no.31)の左幅にも左右反転する形で表されています。(Y.M)

22 板倉星光(いたくら せいこう)「螢」  
昭和初期 絹本着色 培広庵コレクション

女性は、桐の花が描かれた友禅の着物を着て、藍に花柄の帯を締めています。切れ長の目と鬢(びん)の張った髪の特徴から江戸中期の風俗を表したものと考えられます。飛ぶ虫は螢。お尻のところが光っていますので、この絵は螢狩りをしているところのようです。ただし、螢は、和泉式部が恋する自身の魂と沢の螢を重ねて歌を詠み、『源氏物語』にも登場するような恋の寓意なのかもしれません。(Y.M)

23 紺谷光俊(こんたに こうしゅん)「手鏡」  
大正中期 絹本着色 培広庵コレクション

二階の腰高窓(こしたかまど)に座る若い芸妓(げいぎ)を表した作品。窓の外の柳が風になびいて涼しそうです。着物の柄は、源氏香(げんじこう)模様。香道で行われる組香を図案化したものです。彼女は、松と鶴が表された鏡を使って、鬢(びん)のほつれを直しています。体がつくる逆S字ラインは、当時流行した竹久夢二の美人画に触発されたものなのでしょう。頭の周辺にあるぼかしは大正期に見られる表現の一つです。(Y.M)

24 増原宗一(ますはら そういち)「夏の宵」  
1926(大正 15)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

着物の前をはだけて、団扇で風を送る女性は、身支度を調える芸妓(げいぎ)なのでしょうか。その容貌は経験の長さを感じさせ、花尽くしに千鳥の着物をまとった後ろ姿になまめかしさを滲ませています。奥にかけられた布がゆれており、わずかな風があるのかもしれません。師の鏑木清方(かぶらき きよかた)は大正期に耽美的な個性表現を行いました。増原は、その傾向に惹かれ試みた人でした。現存する作品が少ない作家の一点です。(Y.M)

25 鏑木清方(かぶらき きよかた)「翠影(すいえい)」  
1923(大正 12)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

沢のほとりに立ち、女性が洗い髪を乾かしています。清方の作品に、大正 6(1917)年の第 11 回文部省美術展覧会(文展)で特選となった〈黒髪〉があり、そこでは若い女性が髪を洗い、もう一人は立ち姿で洗髪を梳(くしけず)る姿が描かれました。本作もその作品に連なるものなのでしょう。風にそよぐ竹林やまだ実の青い桃の木を背景に、ひとりたたずむその表情はとても涼しげです。(H.M)

26 梶原緋佐子(かじわら ひさこ)「たそがれの庭」

1931(昭和6)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

大正期に働く女性の悲哀を描いた緋佐子(ひさこ)は、昭和に入るとその画風を一変させ、優しげで清らかな令嬢の姿を描くようになります。この夕涼みをする芸妓(げいぎ)の姿にも画家が得意とした重々しい色彩は影をひそめ、さわやかな情趣が感じられます。庭に揺れる竹や涼しげな池の様子が夏らしさをいっそう引き立てます。(H.M)

27 梶原緋佐子(かじわら ひさこ)「涼風」

昭和40年代 絹本着色 培広庵コレクション

丸い鬘(まげ)の割れ目に赤い鹿の子がのぞく割(われ)しのぶという結い方に、華やかな花簪(はなかんざし)を付け、明るい色柄の着物を身につけている彼女は、若い舞妓(まいこ)です。鴨川沿いで宴を離れ、酔いを醒ましているのでしょうか。川の流に目を落としているさまは憂いをふくみ、大人びた印象を与えます。(H.M)

28 川崎小虎(かわさき しょうこ)「髪すき」

1922(大正11)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

小虎は大和絵の伝統を学んだ人で、初期は平安の女性を題材とした作品をよく表しています。これもそのうちの一点です。長い髪を梳櫛(すきぐし)で梳くときは、人の助けを必要としましたが、この絵の女性は一人鏡に向かっています。誰かを密かに待つようすなののでしょうか。繊細な線を使って表された顔の表情を見ていくと、秘めた内面を想像することもできるようです。(Y.M)

29 中村貞以(なかむら ていひ)「単衣(ひとえ)の人」

昭和30年代 絹本着色 桑田金顯氏蔵

第2次世界大戦後の昭和20年代から30年代の初め頃、和装にも大きな時代の変化がありました。着物や帯の文様に、洋服と同じようなプリント柄や抽象絵画の影響が表れ、新鮮な感覚を示しました。また、髪型の面では、これも洋装と共通するのですが、前髪にたっぷりとパーマをかけ、耳の後ろへ引き詰めたスタイルが流行しています。本作品には、そのような澆刺として活発な戦後女性の姿が表されています。(Y.M)

30 寺島紫明(てらしま しめい) 甲南夫人

1950(昭和25)年頃 紙本着色 培広庵コレクション

紫明は、1936(昭和11)年に東京から故郷に近い兵庫県西宮に転居してから、同時代の女性に取材し、人物の内面を見つめた表現を深めていきました。戦後に描かれた本作品を見ても、その特徴がうかがえま

す。時代の風俗もよく捉えており、髷(かもじ)(添え髪)を入れて膨らませた当時流行の髪型や髪を抑える銀のヘアバンドも描かれています。阪神沿線の豊かな家庭の婦人なのでしょう。(Y.M)

解説 森 芳功(Y.M)<徳島県立近代美術館・学芸員>  
宮崎 晴子(H.M)<徳島県立近代美術館・学芸員>